

○女子栄養大学(主) 三善勝代 川鉄病院付属高等看護学院(主) 小保方稔子
お茶の水女子大学政 鶴沢由美子 共栄学園短大生活学科 山田祐子

【目的】 近年、わが国の主として既婚女性たちの間に、自営業ないしこれに準じた形態働く「セルフ・エンプロイド」のケースが目立つ。これは女性と労働をめぐる'80年代以降の新動向の一つとして注目されてはいるものの、その名称および概念についてはまだ共通理解が得られていない現状にある。また、比較的まとまった数を直接扱った包括的な実態調査研究の例も少ない。過労死の危険が取り沙汰され、個人生活尊重の働き方・生き方が求められている現在、彼女たちのこのスタイルはそれに何らかの示唆を与えるかもしれない。そこで、世田谷女性センターの委託を機に、その実態把握を試みた。

【方法】 「セルフ・エンプロイド」の働き方を、世田谷区に在住して同区の内外で、あるいは在住はしないが同区内で行う、女性55人(就労経験年数は不問。書物や新聞記事あるいは知人の紹介によって得た)に対する聞き取り。調査実施期間は1991年9月から12月。

【結果】 ①対象者の平均年齢は45歳。②就労業種は、衣食住関係のほか、従来型のビジネス・イメージとは異なる分野も含み多岐にわたったが、10タイプに整理できた。③この働き方の長所として、時間的に融通がきき自己裁量の余地も大きい点が33名から指摘された。④雇用労働への就労希望度(4段階評価)については、「希望する」(27名)と「しない」にほぼ二分された。が、各場合の程度まで含めると、後者の方は強い否定「まったく希望しない」への回答であり、全体の傾向はそれに拒絶的と見えた。⑤自分にとっての働く意味として、「自活」といった経済面のみを指摘した者は4名にすぎず、「生きがい」や「自己表現」など、精神面の充足を挙げる者が大多数であった。